

徳山薬剤師会だより

令和3年
7月
第16号

発行元：(一社)徳山薬剤師会 〒745-0822 周南市孝田町7-1 TEL.0834-39-1105 FAX.0834-39-1106

知って防ごう、薬剤耐性菌

徳山中央病院 薬剤師 越智 達郎

新型コロナウイルスが日本国内で流行し、1年以上が経ちました。感染対策の意識が高まった今、薬剤耐性菌についてはまだまだ一般の方々には周知されていないのが現状です。

今回はこの薬剤耐性菌について分かりやすく説明したいと思います。



みなさんは「抗菌薬」や「抗生物質」ですと処方されて、服用したことはあるでしょうか。よく「細菌をやっつけてくれる薬です」と言われて渡されるお薬です。薬剤耐性菌というのは、本来なら効かはずの抗菌薬が効かなくなってしまう菌の事を言います。

どうしてこのようなことが起こるのか？原因は様々ですが、次のようなことが考えられています。

- ① 抗菌薬の投与量が本来投与されるべき量よりも少ない。
- ② 抗菌薬を治療途中で中断してしまう。
- ③ 同じ抗菌薬を長期間使用する。
- ④ 不要な抗菌薬を使用する。



などがあげられます。

① や ② のケースのように中途半端に抗菌薬が使用された場合、細菌が自分自身の形を変えたり、抗菌薬自体を分解する物質を作り出したりと、様々な工夫をして生き延びようとします。そして最終的に生き残ったものが薬剤耐性菌として体内に生息していきます。

健康な状態であれば問題は起こらないかもしれませんが、何かしらの病気で免疫力が低下した場合に、その薬剤耐性菌が増殖し始めると、抗菌薬が効きづらくなっているので、重症化してしまう可能性が高くなります。また、その人から他の人に移って薬剤耐性菌による感染拡大が起こってしまうと大変ですね。





また④のケースにはなりますが、いわゆる「かぜ」とよばれる症状に抗菌薬が処方されることがあります。「かぜ」の9割以上の原因はウイルスによるものであり、抗菌薬は効きません。これもまた、薬剤耐性菌を生んでしまう原因となってしまいます。

単なる「かぜ」に対して、医師から患者さんへ抗菌薬を処方されるケースはここ数年でかなり減ってきましたが、患者さんから医師へ抗菌薬を求めるケースがまだまだ後を絶たないそうです。医師も患者さんから求められると断りづらいというのが本音のようです。一般の方々の意識も変えていく必要があるということですね。

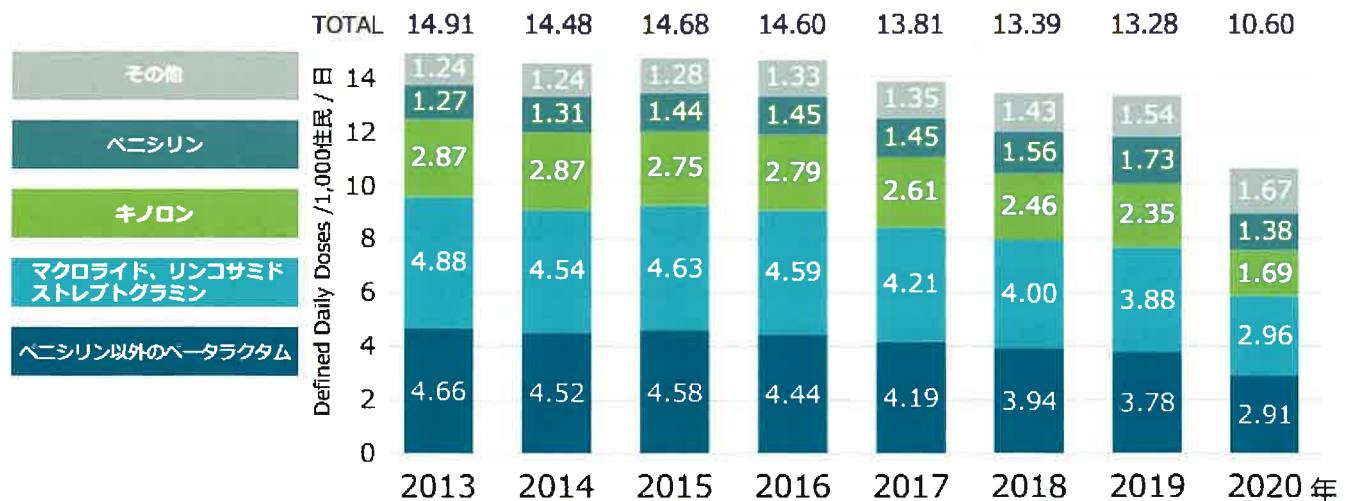
薬剤耐性菌がいかに恐ろしいのか、それはすでに迫っていることです。

国内で薬剤耐性菌が原因で亡くなった人の数を2017年に初めて調査したところ、全国で8千人以上が亡くなっているという推計が出ています。ここ最近の年間の交通事故死者数が約3千人ですので倍以上にも及んでいます。さらにこのまま何も対策をとらなかった場合、将来的にはがんによる死者数をも超えると言われてしています。

新型コロナウイルスによる国民の感染防止対策の影響によるのか、2020年の抗菌薬使用量（販売量ベースですが）は著しく減少しました。マスクや手指消毒などの感染防止対策が不要な抗菌薬の使用を抑え、薬剤耐性菌の増加防止にもつながるのであれば、たとえ新型コロナウイルスが終息したとしても、今後も感染防止対策を続けることが私たち自身の将来を守ることになるでしょう。



図1: 販売量によるサーベイランス (2013年-2020年)



(AMRリファレンスセンター「2020年度 薬剤耐性問題を総括」より)